

社会マネジメント学科と地域連携活動

— 着任1年目の取組み —

山 本 匡 毅

1. はじめに

相模女子大学に人間社会学部社会マネジメント学科が開設されて10年が経過した。本特集で紹介されているように、社会マネジメント学科は地域連携活動に注力してきた。社会マネジメント学科は、ゼミナールや専門科目でも多くの地域連携活動が行われている。この地域連携活動の一環として開設されている専門科目が「地域連携プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ」である。筆者は縁あって、当該科目の担当教員として、2017年4月に着任した。着任1年目の地域連携活動は、前任者の竹本康博教授（以下、竹本先生）の蓄積を継承したとはいえ、試行錯誤の連続であった。

筆者は「地域連携プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ」を担当するに当たり、当初、フィールドとして2つの地域を準備した。それが津久井都市農村交流協議会と山形鉄道株式会社である。前者は、2016年度から竹本先生がご担当され、学生による地域資源の発見が済んでおり、次の展開が期待されている状況であった。すなわち、竹本先生の培われた蓄積を踏まえ、津久井地域を如何に活性化していくかが課題であった。他方で後者の山形鉄道株式会社との連携は、筆者が前任校時代に準備したものであり、典型的な地方の課題である公共交通の再生について、地元自治体や企業の要望に応じて、社会調査を行うものである。

当初はこの2つのフィールドで「地域連携プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ」の実習を進める予定であった。ところが2017年度に入り、筆者へ横浜山手やってみよう会のメンバーより連携の要望が出され、2017年度秋学期より同会との連携活動を開始した。

このように2017年度の「地域連携プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ」は本当に試行錯誤の中で、連携先を決め、活動を進めてきた¹。本稿は、以上の地域連携活動について、着

任1年目の新任教員が「地域連携プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ」でどのように実践を行ったのか、実際の活動を紹介し、活動を報告するものである。

2. 津久井都市農村交流協議会（神奈川県相模原市）

津久井都市農村交流協議会（以下、協議会）は、津久井地域の団体から構成される地域活性化を目的とした組織である²。協議会は、津久井地域の金原地区を中心に圃場整備と販路開拓による地域活性化を進めてきた。2017年度は、2016年度に引き続いて本学科と協議会で連携することが確認されていたため、今年度の進め方を具体的に考えていくことが求められていた。そこで2017年4月17日（月）に事務局である相模原市役所都市建設局まちづくり事業部都市整備課まちづくり班（以下、相模原市都市整備課）と協議を行った。その結果、①食、農のリスト化³、②農作物の食べ方、③地場産品のパッケージについて取り組むとともに、併せて地域の魅力を外の視点から見つけることを決定した⁴。

この方針に従って、2017年6月3日（土）に第一回現地調査を行った。当該調査では、主に津久井地域の資源を確認するとともに、参加学生が地理的特性を理解することを調査目的とした。当日に訪問した施設は図表1、その時の様子は図表2である。

図表1 2017年6月3日(土)の調査行程

2017年6月3日(土) 第1回津久井調査訪問地	
1	地域拠点整備予定地・富士塚
2	城山公園寝小屋地区パークセンター
3	城山公園花の苑池・津久井湖観光センター
4	観音寺
5	あぐりんずつくい（津久井郡農業農産物販売所）
6	鳥居原ふれあいの館
7	オギノパン

出所：筆者作成

図表2 第1回調査の様子



出所：筆者撮影

第1回調査で津久井地域の特徴や地理的特性を把握したことから、その調査結果について、協議会のメンバーと本学学生の間で意見交換を行うことになった。意見交換を実施するに当たっては、第1回調査で学生が調べた項目を模造紙に書き出し、それを用いて学生から協議会メンバーに説明した上で、意見交換を行うこととし、2017年7月9日（日）午後に鳥居原ふれあいの館で開催した（図表3）。

図表3 2017年7月9日の発表



出所：筆者撮影

図表4 2017年9月14日の意見交換



出所：筆者撮影

図表5 9月14日(木)～15日(金)の調査行程

2017年9月14日(木)～15日(金) 第2回津久井調査訪問地		
1日目(9月14日(木))		
	訪問地	ヒアリング項目
1	エビラ沢の滝	地域資源の確認
2	鳥居原ふれあいの館	津久井在来大豆の定食試食、在来大豆の生産、鳥獣被害
3	津久井郡農協あぐりんず	津久井在来大豆の販売、郷土料理
4	津久井都市農村交流協議会	意見交換
2日目(9月15日(金))		
6	三太旅館	三太物語、旅館の歴史
7	津久井都市農村交流協議会メンバー	地元食材のお菓子
8	ドリームファーム	地域活性化、レストラン経営
9	石井金原養鶏所	養鶏、農業

出所：筆者作成

春学期の学習成果を深めるため、夏休みに合宿形式で現地のヒアリング調査（第2回調査）を行うこととした。第2回調査では、住民や事業者の方々から地域資源を聞き取ることを目的とした。第2回調査は2017年9月14日（木）から15日（金）の1泊2日で実施し、宿泊は地域内にある三太旅館に泊まった（図表4）。

夏休みまでの成果をもとに津久井地域活性化への活動をいかにするか、協議会、相模原市都市整備課、本学で協議し、結果として津久井在来大豆を使った洋菓子の商品開発、及び津久井在来大豆きな粉のパッケージデザインを行うことが決まった。秋学期の授業では、商品開発をするお菓子の種類、味の検討や、パッケージデザインの検討を進めた。お菓子の商品開発では、相模大野のユニコムプラザにある実習室（調理室）を活用して、実際にお菓子の試作を行った。

図表6 特産祭で報告した内容



出所：筆者撮影

図表7 特産祭のブース



出所：筆者撮影

これまでの調査結果と商品開発したお菓子、及び津久井在来大豆きな粉のパッケージデザインの成果は、2017年12月3日（日）に金原地区で開催されたふらっとまると津久井特産祭において公表し、当日は模造紙による発表、試作したお菓子の試食によるアンケート調査、津久井在来大豆きな粉のパッケージデザインに関するアンケート調査を実施した（図表6、図表7）。

現在（2018年1月）は、アンケートを集計したお菓子とパッケージについて、実際に販売できるように準備を進めている。今後、2018年3月までにお菓子の商品開発の方向性を決めるとともに、津久井在来大豆きな粉の学生デザインのパッケージ商品を試験販売することが目標である。

3. 山形鉄道株式会社と長井市役所（山形県長井市）

山形鉄道は、山形県置賜地方を走る第三セクター鉄道である。同線の中心的な都市は山形県長井市であり、山形鉄道は長井市にとって唯一の軌道系交通となっている。現在、山形鉄道への支援の中核的機能を担っているのが、長井市役所地域づくり推進課である。筆者が「地域連携プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱ」を担当するに当たり、以前、地方版総合戦略の委員や、前任校での受託調査などの関係があった同市に調査への協力を依頼した。長井市からは、山形鉄道の活性化に関する調査を提案され、当該科目の社会調査士科目としての性格とも合致すると考え、お願いすることにした。

当初、山形鉄道の活性化調査のみを前提として授業の組み立てを予定していたが、授業開始前後になって、長井市で「長井ビジネスチャレンジコンテスト」を開催することが分かった。その中のビジネスアイデア部門一般枠が、大学の「発想女子」のコンセプトと合致すると考え、このコンテストへの応募も授業内容に追加することとした。

春学期の授業では、長井市の地域資源についてインターネットを用いて調べ、その結果をブレインストーミングとKJ法を用いて、グループワーク形式でまとめていった。またヒアリング調査に慣れるために学生でコンビを組み、相互のインタビュー調査の練習も行なった。その成果を踏まえて、2017年6月20日（火）に長井市東京事務所を訪問し、東京事務所顧問からの聞き取り調査と、地域食材を中心とする地域資源の発掘を行い、夏休みの調査実習の事前学習とした（図表8、図表9）。

図表8 長井市東京事務所でのヒアリング



出所：筆者撮影

図表9 長井市の地域食材



出所：筆者撮影

授業が7月に入ると、山形鉄道の調査に関する準備として、グループ分けや担当調査先の分担、調査票の設計を進めた。これらの準備を踏まえ、山形鉄道の調査と長井ビジネスチャレンジコンテストの予備的調査を2017年8月6日（日）～8月9日（水）に実施した。調査の実施に当たっては、単なる調査旅行にならないように、初日には山形鉄道羽前成田駅の保存活動を行っている「おらだの会」への訪問、聞き取り調査、交流会を組み込み（図表11）、長井市や山形鉄道への理解を深めるとともに、地域の魅力を学生に理解してもらえるように工夫した。

山形鉄道の活性化調査では、山形鉄道の沿線に立地する企業が通勤や出張で鉄道利用する可能性を把握することを目的とした。調査目的を明らかにするために、6名の学生を3名ずつの2班に分け、2日間で合計18社・団体を訪問し（図表10）、ヒアリング調査を行った（図表12）。さらに最終日の4日目には2つの班に分かれて、長井市の地域資源の発掘を行い、長井ビジネスチャレンジコンテストの予備的調査とした。

図表10 長井市調査の行程

2017年 8 月 7 日(月)～8 日(火) 山形鉄道調査に係る訪問企業・団体		
1 日目 (8 月 7 日(月))		
	A 班	B 班
1	長井郵便局 (長井市)	公立置賜総合病院 (川西町)
2	製造業 A 社 (白鷹町)	製造業 C 社 (長井市)
3	公立置賜長井病院 (長井市)	製造業 D 社 (白鷹町)
4	製造業 B 社 (長井市)	製造業 E 社 (長井市)
5		製造業 F 社 (長井市)
2 日目 (8 月 8 日(火))		
6	長井市役所 (長井市)	白鷹町役場 (白鷹町)
7	製造業 G 社 (長井市)	県立福祉施設 (長井市)
8	製造業 H 社 (長井市)	スーパーマーケット K 社 (長井市)
9	製造業 I 社 (長井市)	民間病院 (長井市)
10	自動車教習所 J 社 (長井市)	

出所：筆者作成

図表11 おらだの会との交流



出所：筆者撮影

図表12 ヒアリング調査の様子



出所：筆者撮影

夏休みに行った調査結果について、秋学期からまとめの作業を進めた。9月から取り組んだのは、長井ビジネスチャレンジコンテストのプラン提案である。2つの班に分かれて、アイデアを考えた。それぞれの班から「馬肉餃子」と「長井スイーツ」の提案を行ったが、結果は残念ながら落選であった⁵。10月後半からは山形鉄道の活性化について、ヒアリング調査の結果とりまとめと提案の検討を進め、おおむね12月までに報告書を作成した。

本来であれば、残すは2018年3月に担当教員が最終報告書を山形鉄道と長井市役所地域づくり推進課へ提出する予定だけであった。ところが学生から希望があり、長井市中心市街地で2018年2月3日（土）に開催されるながい雪灯り回廊まつりのボランティアへ参加することとなった。当日は、旅費が自己負担にも関わらず、受講生3名が参加する予定である⁶。この動きは、筆者が予想していなかったことであり、この授業が本学学生の地方へ興味を持つ機会になったことは地方創生の流れにも通じ、授業目的が達成することができたと考えている。

4. 横浜山手やってみよう会（神奈川県横浜市）

横浜山手やってみよう会（以下、やってみよう会）は、横浜市中区大和町にある商店主、住民によって結成されたまちづくり団体である。従来、大和町には3つの商店会が存在してきた。しかしながら、交通体系や買い物行動の変化により、大和町の商店街は賑わいが減ってきていた。そこで、商店会の垣根を超え、さらに住民を巻き込んだ地域活性化を目指している組織としてやってみよう会で結成された⁷。

本学とやってみよう会の関係は、筆者がやってみよう会の中核メンバーの一人と友人であったことに始まる。筆者が2017年春頃に本学へ着任したことを友人に伝えた時に、友人からやってみよう会の活動への協力の打診があった。そこで秋学期から学生がやってみよう会の活動に参加することを企画し、やってみよう会会長、副会長と調整を進めた。その結果、2017年10月28日（日）に開催予定であった大和町ハロウィーンストリート（以下、ハロウィン）へ参加することとなった⁸。

大和町のハロウィンは、商店街全体でお菓子を配るほか、飲食店を中心にビアフェスを開催するものである。ここに学生が参加し、道案内やお菓子の配布の実施を計画した。大和町プロジェクトの参加学生は2名であったものの、既存の参加学生に参加を募ったところ、3名の学生が参加する意向を示してくれたこともあり、合計5名の学生でハロウィンに参加した。

ところが実施日は台風の影響を受け、会場周辺が大雨となった。しかしながら、雨が小降りとなったことから、ハロウィンは規模を縮小して開催された。学生は仮装をして（図表13）、地図やお菓子の配布を行った。学生は雨にも負けず、ハロウィンの参加者へ精一杯のおもてなしを行っていた。

図表13 ハロウィンの様子



出所：筆者撮影

図表14 大和町フィールドワークの様子



出所：筆者撮影

ハロウィンが一段落したことから、大和町プロジェクトの学生2名で地域・社会調査を行うこととした。この調査の目的は、大和町が置かれている経済・社会状況、地理的条件を踏まえて、地域づくりの現状を理解することである。このフィールドワークは、2017年12月17日（日）に実施した（図表14）。当日は、明治大学理工学部助教で地元在住の建築士の方にご案内いただいた。調査を行った内容は、地域連携プロジェクト演習Ⅱの授業内でまとめを進めているところである。この成果は、次年度の活動につなげていきたいと考えている。

5. おわりに

本稿では、今年度から社会マネジメント学科に着任した筆者が、授業で地域連携をどのように進めたのかを明らかにした。今後は、2018年度以降の展開を考えていかなければならない。今のところ、津久井プロジェクトは次年度も継続して地域連携プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱで実習を行う予定である。加えて、本学科1年次の必修科目である「地域で学ぶ社会のしくみ」の実習先としてもお伺いできないか、検討しているところである。長井プロジェクトは、次年度には2つのプロジェクトに分割をする。長井市役所地域づくり推進課と連携したプロジェクトは、引き続き、地域連携プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱで実習を行う。他方で、2年目になる長井ビジネスチャレンジコンテストは、筆者が担当するゼミナールにおける夏季休暇の実習で参加する予定としている。最後に大和町プロジェクトは、ゼミナールの実習に完全に移行し、ゼミ生が通年で地域へ入り、連携関係を構築していくことを計画している。

2017年度の地域連携プロジェクト演習Ⅰ・Ⅱは着任1年目の筆者にとって、文字通り試行錯誤の連続であった。それでも何とか地域連携活動が形になったのではないかと考えている。これは、学生や地域の皆さまに助けられて、何とかやってくることが

できたものである。この経験を踏まえて、2018年度以降の社会マネジメント学科の地域連携活動の力になれるように努めていきたいと考えている。

【注】

- ¹ この授業には、春学期11名、秋学期13名（うち前期からの学生が11名）の受講生を迎えることができた。そのうち津久井プロジェクトに5名、長井プロジェクトに6名、大和町プロジェクト（秋学期のみ）に2名が参加した。なお受講生はすべて社会マネジメント学科の3年生である。
- ² 津久井都市農村交流協議会の構成団体は、金原地区まちづくり推進協議会、津久井地域農業者、津久井郡農業協同組合、津久井地域農業経営士会、新規就農者団体、神奈川県農業技術センター北相地区事務所であり、事務局は相模原市役所が担当している。
- ³ 食・農のリスト化は2016年度に、竹本康博・坂本智穂・原野美樹・山口莉穂・山田歩乃佳（2017）の成果が得られている。
- ⁴ 津久井地域の情報発信は、「津久井活性化プロジェクト」の名称により、facebook、Twitter、Instagramによって学生の手で行われた。
- ⁵ この結果は、学生のプランが悪かったのではなく、担当教員の指導方針に起因したものである。
- ⁶ 当日は担当教員である筆者も参加する予定である。
- ⁷ 同会の会長はダイニングバーのオーナー、副会長はクリーニング屋のオーナーであり、商店街とのかかわりも深いことが窺える。
- ⁸ この授業展開に際して、秋学期から地域連携プロジェクト演習Ⅱを履修する学生を追加募集した。

【参考資料】

竹本康博・坂本智穂・原野美樹・山口莉穂・山田歩乃佳（2017）『食・農に関する地域資源調査報告（相模原緑区津久井地区）』